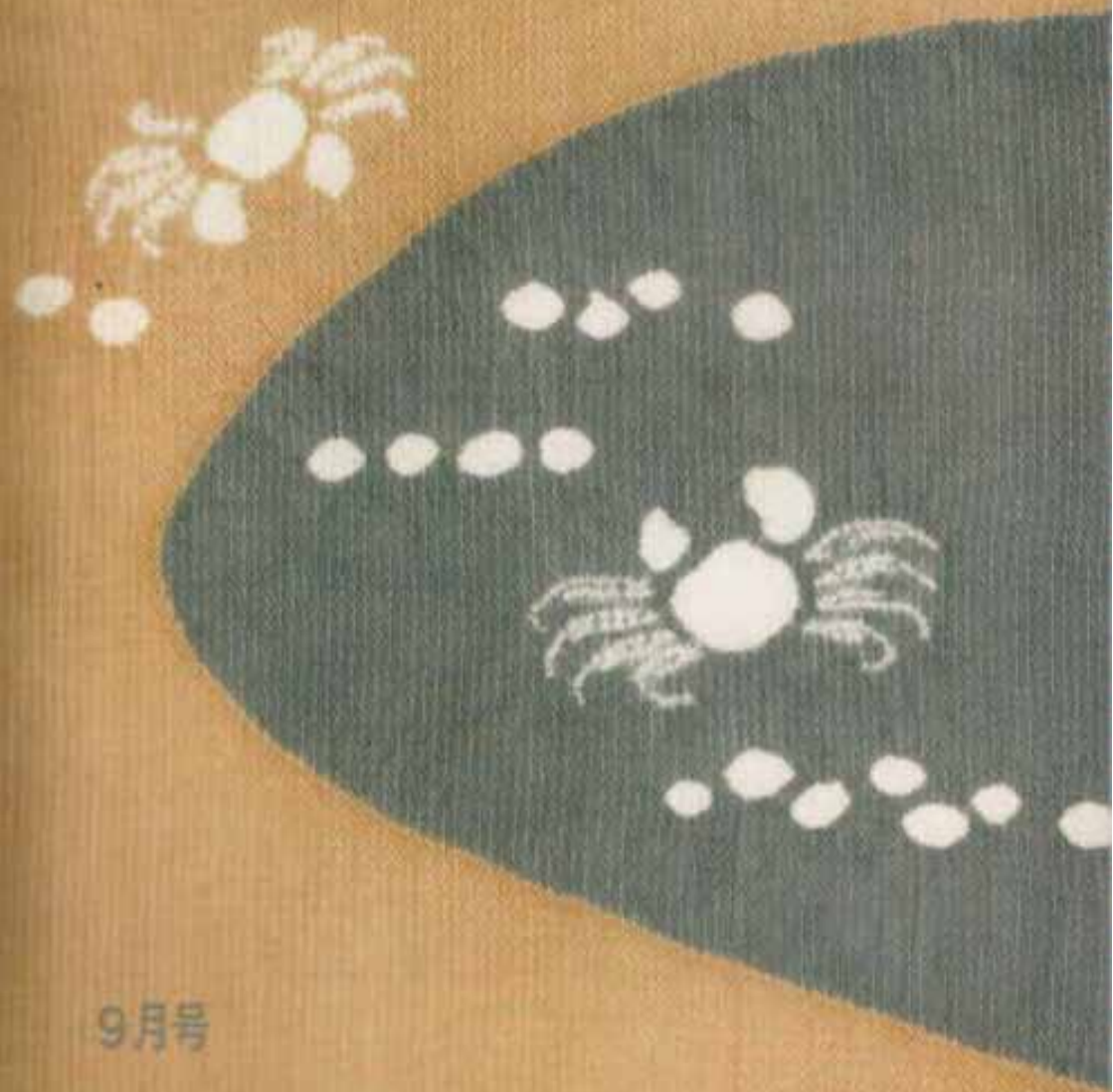


京鹿子

京都府立総合資料館
京鹿子（京鹿子）
（京鹿子）



9月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その八十四



黄昏を帯にたたんで川床の女
紙魚走る二円不足の返し文
文束に眠る声あり紙魚走る
遠雷や二つの嘘を引き寄せる
手短に済ます言ひ訳鴉の子
馴れ初めの話に尾ひれ金魚の夜

浜晩夏砂の骸を抽いてをり
傷心の波を引き寄す夜の秋
吟行・龍安寺

紅蓮の台に御座す水の魂
石庭の影に思案の蜥蜴の子
空蟬の魂の宿りや鏡容池
木洩れ日の曼陀羅ゆかし蓮の寺
寺領地の走り根の噛む樹下涼し

俳句四季

竜淵に潜む里曲は星降る夜

—近詠—

和田 照海

雲の峰

花菖蒲をとこ結びを解くやうに
暮れてより匂ふ水韻 蛩籠
叱られて入水のごとく青蚊帳に
藩侯の池水へこませ水馬
わたつみの野風 呂岬や雲の峰



—近詠—

松本 鷹根

酔芙蓉

真向ひて稲穂の風に恥ぢて佇つ
温め酒入日を酔わす遠嶺あり
靴底を厚く西日の頂に立つ
台風過鳩の怒声に雲割れる
酔芙蓉酔うて入日に手を合わす



塩貝 朱千



離宮の風

茄子艶やか離宮の風の透きとほる
花がらの愛の文つけ初胡瓜
万願寺焼く香に思ひ出せぬこと
杜若のころ再会は軽ろやかに
別れ来て梅雨満月に佇ちつくす

英華採集

待つことに慣れし人生蟻地獄

和歌山 尾崎と代子

蟻地獄は、昆虫ウスバカゲロウの幼虫の時の名前であり軒下等の風雨の避けられる場所のさらさらの砂地に窪みを作り蟻等を捕えて生息している。一度この窪みに入ると中々抜け出せないために蟻にとつては正に地獄である。掲句は、只管待つだけの蟻地獄と自分を重ねているわけではないが、本当にそうであろうか？自分から進んで歩み出した事も何度かあるに違いない。しかし、その度に裏切られるのが人の世でもある。この蟻地獄から色々考えさせられる。

噴水のとっぺんにある不安感

戸田 遠山 悟史

噴水は年中あるものの夏の暑さの中での涼味は格別で故に夏の季語として分類されているのであろう。噴水は、全国で様々な場所に設置されているが一番は公園と思う。公園は、人にとつて癒しの空間であつて心が落ち着くのである。その噴水も偶々遭遇した折じつくり観察すると一番上に届いた水は、必ず下に落ちる。その繰り返しで巡回しているわけで、水を擬人化すれば天辺にいった水は奈落の底に落ちる。下五に結んだ不安感は人生に通じる。

草餅のどこを押しても笑ひあり

福山 横溝 和恵

草餅に使われる草は今では蓬が定番となつているが、昔は母子草（春の七草のゴギョウ）で名前も草餅ではなく母餅であつたらしい。そして、餅に草を練り込む風習は草の香りには邪気を祓う力があると信じられ、上巳の節句には母子草を混ぜ込んだ餅を食し、女子の健やかな成長を願う雛祭りへと広まってゆく。この歴史的背景を考慮すれば、掲句は日本の家庭の平和な日常の中に切つては切れない家族の「笑い」が底辺にあるのだらう。

神麓集

紅蜀葵 沼田巴字

生き生きて力強さよ紅蜀葵
紅蜀葵わが晩年の自画像に
夢の中蜻蛉に乗り夕陽中
人のため生きるさだめや蜻蛉飛ぶ
念仏を唱へるくらし鱗雲

今朝の秋 植村蘇星

尋常に生かされ生きて今朝の秋
生かされて一日一善今朝の秋
共存の一日一笑今朝の秋
中庸に生きて祖を守り今朝の秋
共生の明日に紡ぐ今朝の秋

秋はじめ 北川孝子

放心か無心か人に秋の礼
こんこんと水湧くおもひ秋はじめ
秋来ると窓に一枚づつの風
へらず口たたたく子が好き夏の果て
みずからは己れが見えず秋に入る

霞草 直江裕子

紫陽花のひとつ有事のいろをなす
気に入らぬ風もあらうに茅花とぶ
みどり児の吐息が花に霞草
母の日のひそと思へば思はれる
大輪の百合溢れ咲く淋しい日

夜来香 イェライシャン 高木晶子

暗黒の時繰り返す夜来香
素麺を茹でる後に首相の声
この土地を出ることもなし柏餅
荒梅雨に浸みては太る胸の汚点
普通より下でも梅は漬けられる

流し目 奥田筆子

肩越しに流し目が来る蛍の夜
一皮むけさなぎは蝶に隣の子
きつかけにすぐ咲きさうな口なしの花
壺売りの運命見透し梅雨の底
夏休み科挙の徒花クイズ王

清流の鮎 伊藤希眸

時期を得て清流の鮎軸を出る
待たず落つ青梅笊と棒一本
梅雨催ひ夕べ深まりゆく窓辺
かき氷赤しおそろし吾が齢
青葉濃し店先にある銀の盆

泪夫藍の花 井上菜摘子

花野原不在の兄を追うてきて
探し物見つからなくていい花野
着信のなき日の檸檬したたらす
泪夫藍の花バイエルをはじめから
身に入むやゆっくり毀すラテアート

神麓集

神麓集

源氏語り 村田あを衣

少年はミントの匂ひ緑さす
頬杖は昨日の重さ春愁ふ
合づちはゆるき拘束春うれふ
巻き紙の文の返書や春の宵
藤ゆるる源氏語りの佳境かな

テレビの戦 山中志津子

ゆすらうめ回遊式の縄電車
卯の花のほろほろショートストーリー
葎切が私の長編ずたずたに
梅雨の虹手垢のつかぬ言葉欲る
豆飯やテレビの戦憂ひつつ

昭和の書 井尻妙子

雲母虫まだ息のある昭和の書
夕風の仕切る賀茂川月見草
冷酒旨し読点のなきをんな坂
川床涼み母のやうなる風の来て
遠雷や塩すこし足す煮炊きもの

どこまでの 鷺山珀眉

あめつちの阿吽の呼吸緑雨かな
西口を出て夕焼けの真ん中へ
朝ぐもり境界線の動かざる
どこまでの途上どこまでの滴り
言ひ訳を考へてゐる羽抜け鳥

青田波 亀井福恵

青田波鷺を白帆のごとく置き
枝折戸の鍵なし一人静かな
白靴に急接近の潦
被爆ドームその十方の蟬しぐれ
初夏の雲ひとひらや忌を修す

螢 菊池和子

行行子はや変声期止められず
追憶のそばから溶ける螢かな
午後の庭ひとり語りの落し文
泣き顔も笑顔も日傘さしてより
塩といふちっちゃな魔法豆の飯

舟泊 西村白杼

浜木綿や涛寄す伊根の舟泊
二重虹苦笑うて受け流す
夕ぐれの学舎チャイム時計草
ひと言は胸の奥へと梅雨寒し
大江山空気食べ過ぎ蟻太る

小さき宇宙 安田優歌

郭公のワルツに目覚む有馬の湯
杖の身を追ひ越してゆく夏の蝶
手の平は小さき宇宙や流灯会
甘樫^{あまかし}丘に薫風と言ふ反戦歌
今朝の庭私のための薔薇一輪

一陣の風 本郷 公子

青夜の灯 佐藤 千恵

時の日の三分^{ぶん}もどす砂時計
再会は一陣の風黒揚羽
梅雨月夜はるかに母の子守唄
白き画布へ押し寄せてくる万緑
吊忍庇の深き京町家

麦秋の煙の向かう未来都市
太白や麦秋の煙おさまりぬ
薔薇の風小指の傷のほぼ癒えて
白鷺と田のあんばいを見ておりぬ
青夜の灯ただ心音をかさねぬ

新樹光 石原 孝人

竹皮を脱ぎ琅玕のたたづまひ
万緑のなだれを止めて水鏡
花みかん島の斜面の捨て畑
夏潮のひかり引き寄せ野風呂岬
大楠の一樹に万の新樹光



京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

水琴集

取説のメーカー目線四月馬鹿

青梅 金子 野生

八十八夜禪掛けなむ伎芸天

鯉幟吐かせし息は天のもの

今年竹一皮剥けしあとの覇気

薰風や佛の顔に三度逢ふ

里青葉どの道行くも妙なる香

朝倉 小池かつえ

子かまきり草に生まれて草色に

熟れ麦の触るれば崩れてしまひさう

柳散るひとり遊びのけんけんぱ

乱舞する螢沢より湧き出でて

緊急放送届かぬ窓の夏至あかり

走り梅雨金融街は黙の華

なめくぢら出番なき日の光り跡

饒舌な風の色恋ふ夏木立

芍薬の立姿なく枯れゆくか

東京 大政 睦子

旅の日の誰かに似たる七変化

福山 藤井 杏愛

実杏や流されてなほ囁けり

父母の空にいたたく若葉雨

心太老境といふ消去法

再会の沈黙に咲く遠花火

みほとけの千年の翳梅雨寒し

和歌山 辻本 俊子

わだかまり夏野の風にほどけゆく

補陀落へゆかむ葉月の潮分けて

時計草波音絶えぬ無人駅

梅雨寒や職員室の灯のにじみ

地球てふやさしきまろみ田水張る

堺 寺岡 直美

薄紅の残照の月田水張る

万緑に沈む一村水はしる

万緑の奥の溪谷空円か

水音や糺の森の著我の花

でで虫の渡りかねたる世の歪み

辻 量子

でで虫の答へはひとつ i e t . i t . b e

夏立つや水面あまざず乱反射

サンドレスそ知らぬふりでマティーニを

露を煮る妣の生活を引き寄せて

和歌山 尾崎と代子

鳶の羽音まぢかに聞こゆ大夏野

ラジオオラスハザードマップピンク色

合唱団恋をとりもつ雨蛙

待つことに慣れし人生蟻地獄

薫風や胸の奥まで浄化して

戸田 遠山 悟史

若駒の頂点に立ち聖五月

遠山の夕焼や観覧車

噴水のでっぺんにある不安感

機嫌よく今日を過ごしてビール飲む

挽ぎたてのいちごのやうな嫁御寮

福山 横溝 和恵

春蟬や往時を刻む大時計

明易し遊女逢瀬の千砂子波止

草餅のどこを押しても笑ひあり

恐くないひとりじゃないよ一本桜

